

第二百九十二話 実はソ連と戦っていた！

400頁余りの本をA4一枚に要約するのは至難であるが、興味深いテーマであり、小生の理解の範囲で、敢えて挑戦したい。その書籍は、「日米開戦と二人のソ連スパイ」斎藤三知雄著（PHP 研究所刊）である。近年秘密解除された諸文書（米：ヴェノナ文書、OASIA 資料、KGB 資料）からソ連スパイの活動状況が伺われるとされる。

1 1940（S15）年前後のソ連をめぐる情勢と各国の思惑



独ソ不可侵条約調印（1939/8/23）、日独伊三国同盟締結（1940/9/27）、日ソ中立条約締結（1941/4/13）、欧州を席卷した独の英国侵攻をも目撃とされていたが、独はソ連に奇襲攻撃を敢行（1941/6/22）した。この国際情勢の急変を受けて、日本はじめ各国は国策の再検討を迫られた。

- (1) ソ連 スターリンの関心は、この機に乗じて日本軍が北進し、対ソ攻撃に踏み切るかどうかであり、日独の挟撃を受ければソ連の敗北は免れない。日本に南進させ或いは少なくとも北進させない方策として米国の国策に影響を及ぼすことを考えた。折から日米交渉が開始されてもおり、以前から米国内に植え付けたシンパ（裏の共産黨員、政権内に少なくとも数百人規模とも。ソ連の諜報（コミンテルン、GRU、KGB など多岐）を動かして米国を動かすことも可能であると判断したと考えられる。
- (2) 日本 欧州情勢の急変を受けて国策の再検討、北進か南進か、日米交渉方針
- (3) 米国 米国は基本的には戦争を嫌っていた。ル大統領は、チャーチルからせつつかれていたとは云え、手枷・足枷で動けず、欧州第一主義であり、太平洋正面は準備が整うまでは、静謐が基本ポリシーであった。

2 三者の暗闘に翻弄された日本

同書には、日本にとって対米戦決意を迫られた石油禁輸と最後通牒ともいえるハル・ノート等々に彼等スパイが如何に影響力を及ぼしたかが活写されている。

2 ルーズベル政権内の対日方針決定動向

- (1) 外交を所掌する国務省に財務省が介入し、国務・財務両省等ではソ連のスパイが急速に勢力を伸長し、長官や大統領にまで影響を及ぼしつつあった。更には、親中・対日強硬派やその傾向のあるマスコミや動員大衆もあり、次第に対日政策は厳しくなりつつあった。
- (2) 対日石油禁輸
対日石油禁輸に暗躍したのは、モーゲンソー財務長官であり、そこにはホワイト一派が根を張っていた。ハル国務長官は対日石油制限は考えていたものの禁輸までは考えていなかったが、ハルの不在間に禁輸が既成事実化された。蘭印の希望を押さえつけ、石油会社にも圧力をかけるヒス、蘭印は苦悩した。
- (3) ホワイト案をベースに作成されたハル・ノートであるが、原案から重要な文言が削除されている。その文言が生きておれば、日本も妥協が可能だったかもしれない。所謂「満州条項」（中国から満州を除く）の文言を国務省は削除してしまったのだ。国務省顧問の親中・対日強硬派のホーンベックが削除したのか？日本政府は、鼻から満州撤退が求められていると決めつけていたのも問題だが…。
- (4) 日米首脳会談
近衛首相とル大統領の日米首脳会談も国務省のヒスとヒスに影響されたアチソンによって阻止された。
- (5) 暫定協定案 日本が期待した暫定協定案も突然に放擲された。ソ連スパイまたは対日強硬派によるものか未だに謎であるという。

*エピソードに曰く、『日本は・・・ソ連と戦っていたのかもしれない。』

(了)